

化したチャンネルについても言える。テレビの世界に姿を現すイスラムに関し、視聴者の志向やニーズが決定的な意味を持ち始めたのである。明らかに反イスラム的な内容でもない限り、視聴率を稼げる人物やテーマは採用され、そうしたチャンネルに登場するものは翻って、イスラム性を獲得する。こうしたプロセスにおいて、ウラマーは無力というわけではないが、その影響力は限定的と言わざるを得ない。

今、人々は消費者あるいは生活者として、何を買うか、何をみるか、何を使うかを決定することを通して、ムスリムとしての自己実現を成し遂げようとしている。その結果として、イスラムは、市場において大きな力を持つにいたる。この傾向に拍車をかけるのは、グローバル化によるモノや情報の横溢であり、そのなかでは消費者が選択という行為を迫られるという事実であろう。消費者は、選ばなければならなくなり、その際ひとつの重要な基準として「イスラム性」が浮上するということである。

イスラム法の専門家から見れば完璧なものであっても、消費者に選ばれなければその商品も、その番組も淘汰される。選ばれたものだけが、「イスラム的」商品、「イスラム的」番組として生き残る。そうして生き残ったものが、これからのイスラムのありようを大きく規定していくのではないかと考えられる。

仏教徒が語るアツラー

——教義の壁への挑戦——

小布施 祈恵子

仏教とイスラームは世界宗教の中で最も教義的にかげ離れたものだと考えられており、「無神論」的教えを奉じる仏教徒と「厳格な一神教」徒であるムスリムとの間には相互理解が成立しにくい、とさえ言われることもある。確かにこれまで両者の共通点としてはスーフィズムと禅や倫理・道徳の教えの類似点が指摘される程度であった。また仏教徒とムスリムの相互言及を見ても、ムスリム側からは、仏陀を預言者の一人とみなすことよって仏教に一定の評価を与えようとする動きが少なからず存在してきたが、仏教徒が仏教の教義の枠組みを使ってイスラームを解釈することは稀であった。しかし宗教紛争やいわゆるテロ活動などを通して宗教間の関係が重要視されるにつれ、現代仏教徒の中に仏教とイスラームの間に教義的つながりを見出し、両者の関係の改善をめざす試みが現れてきた。本稿では現代仏教徒によるイスラームへの言及の中から、教義の観点を通して系統的に友好的な議論を展開している例を三つ紹介し、その意義を考察する。

一つ目は、タイ出身のテーラワダ仏教の指導者ブツダダーサ比丘(一九〇六一—一九九三)による見解である。彼はすべての宗教は「空」を究極の真理として共有していると主張しており、仏教以外の宗教で「神」と呼ばれるものをダンマ(法)と同一視している。また彼は「すべての国に使徒が遣わされる」

というクルアーンの言葉をさまざまな宗教同士の教義的つながりの基盤として引用し、「真理を説く神の人」としての「使徒」はすべての宗教に見出せるとしている。さらに、ブツダグーサは釈迦をはじめとする歴史上の宗教指導者たちは、アディブツダ(本初仏)から派生しているとし、包括主義的アプローチを展開している。

次の例は、米国出身でチベット仏教の指導者・研究者であるアレクサンダー・バーズイン(一九四四―)の見解である。彼は神の問題がムスリムにとって大きな重要性を持っていることに注目し、ムスリムとの対話において仏教が無神論であることに直接言及することは避けるべきであると主張している。さらに仏教において神に相当するものとしてアディブツダの概念を導入し、イスラームではアッラーが究極的には人格化されておらず、不可知なる存在であるとされているゆえに、すべてのものの源であり「言葉・概念を超越し、想像できない」アディブツダはムスリムにとって共感しやすいものではないかと述べている。

最後の例は、浄土真宗の僧籍を持ち、英文学および比較文化研究を専門とする学者である狐野利久(一九三―)の見解である。彼は、アッラーと阿弥陀如来はそれぞれの伝統において唯一の救済者および信者による礼拝の対象であり、形も色もなく、またその属性を表すさまざまな名前を持つという共通点を持つっていると指摘している。さらに氏は、イスラームにおけるアブドゥッラー(神の僕)の概念は「如来の奴隷になる」という浄土真宗の思想に通じるものであり、「イスラーム」と「帰

命」は同じ姿勢を表していると主張している。

これらの見解はすべてイスラームにおける神と、仏教の「真理」を示す概念を同列視するアプローチをとっている。その背景にあるのは、二つの宗教を完全に分かちかねない「神の問題」に挑戦をいどみ、仏教側からそれに相当するものを提示することによって現代における仏教徒とムスリムの間に絆の意識を育もうとする意欲である。このような試みはまだ稀ではあるが、これはグローバル化が進み、宗教間の衝突が続く現代世界の状況に対するダイレクトな反応として出てきた極めて現代的な現象であると考えられる。

一 神教による偶像崇拜批判が意味するもの

若林明彦

宗教の類型化の一つである「一神教」対「多神教」というのは、信仰や崇拜の対象が「一」なのか「多」なのかという単なる数の問題として捉えるのなら、その宗教の本質を明らかにする上で大して役に立たない。実際の宗教は、一神教なのか多神教なのか判別しにくいものが多いからだ。問題は、唯一性を強く主張する宗教にとって、「一」とは何か、「多」であることのが許し難いのかということだ。一神教においてもその神が偶像などで偶像化されれば多神教以上に排撃されることからすると、結局、一神教にとって許し難いのは「多」ということよりむしろ偶像崇拜であり、唯一性も反偶像からの帰結として捉え